

# 10 県オリジナル品種ランンキュラス 「てまりシリーズ」の導入促進

■ 香川県農協小豆島花卉部会 ■

(小豆農業改良普及センター 小林弥生)

## ●対象の概要

今年で発足50周年を迎える香川県農協小豆島花卉部会は、管内の主要品目であるキクの生産者で構成されており、これまで伝統ある電照ギクの産地を支えてきた。

しかしながら、近年のキク生産者の高齢化や生産資材等の高騰、輸入輪ギクの増大による価格の低迷等により、産地が縮小しており、一部で野菜等への転換や草花の栽培の導入が進んでいる。

## ●課題を取り上げた理由

キク栽培を縮小する最も大きな要因は、燃油価格の高騰による経費の増大が経営を圧迫していることで、燃油代を比較的要さない品目の導入が望まれていた。

ランンキュラスは全国的にも人気が高まっている切花で、低温性の品目(最低温度 5℃以上)であることから、燃油価格が高騰している中、冬期のキクの補完品目としてランンキュラスが有望であること、また香川県の農業試験場が育成したオリジナル品種「てまりシリーズ」は、優良種苗増殖技術の確立により種苗の安定供給が可能になったことから、ランンキュラスの導入を促進していくこととした。

## ●普及活動の経過

### 1 試験栽培の開始

平成25年より2名の生産者が4aで試験栽培を開始し、市場への試験出荷の結果、早期植えの促成栽培にこだわらず、「1月以降に高品質の切花を出荷して欲しい」との要望もあり、年末ギクの出荷終了後に、1番花の出荷のピークが来るよう、県内の他産地より定植時期をやや遅らすこととした。

栽培の促進に当たっては、普及センターだより等で県オリジナル品種のランンキュラスを紹介し、知名度の向上を図った。

### 2 優良種苗の供給促進と球根の調整

ランンキュラスは自家増殖が可能であり、切花を採取した後の球根を翌年も栽培球としているが、年によって発芽が不安定になったり、ウイルス病に罹病している可能性がある。また種苗会社の球根はウイルスフリー化されていないことが多い。

一方、県のオリジナル品種である「てまりシリーズ」はウイルスフリー化しており、品質も安定しているので、平成27年から新規に栽培を希望する生産者を中心に品種ごとの色や特徴を説明した。加えて、県内の各産地に供給される数量には限度があることから、農協と連携し、配布する球根の数量調整を行った。

### 3 新規生産者を中心とした講習会、現地巡回の開催

ランンキュラスの促成栽培には、冷蔵庫での催芽処理が必要であるため、県の主催する研修会に生産者を引率し、実際の催芽処理を見学してもらった。そして、全ての新規栽培者に、現地で球根消毒や育苗土の水分状況、育苗方法の実演による技術指導を行った。

また、定植方法についても、新規栽培者のほ場を巡回し、定植方法や灌水方法の技術指導を行った。



催芽処理の現地指導

#### 4 関係機関と連携した技術指導の実施

適期に適切な管理ができるように専門指導員や試験場、農協とともに、冷蔵処理中や定植後1番花開花期などの時期別に生育の状況を見ながら、指導を行った。

特に、ラナンキュラスは品種により性質が異なり、また生理・生態が明らかでないことから、関係機関と連携することで、早めに対策を講じた。



巡回指導の様子

#### 5 出荷方法の検討

平成25年からの2年間は、個選による市場出荷と産直販売で、キクと同様、横箱・乾式の出荷形態であったが、平成27年からは、生産者が増えたため、出荷方法について、農協や生産者と検討会を行った。

普及センターより、縦箱は横箱に比べ、花首が曲がりにくく品質面で有利であること、湿式は乾式に比べ、経費は多く要するものの、品質保持の面で優れることや、県内の主要産地では湿式に移行していることを説明した。また、湿式にはおむつ型の資材に保水させる方法と、エコゼリーにより給水する方法の2つのタイプがあることを実物を用いて説明した。

### ●普及活動の成果

#### 1 生産者、栽培面積の増加

平成25年に生産者2名、4aから栽培を開始したラナンキュラス「てまりシリーズ」の生産者は現在7名で、栽培面積は26.5a（前年対比302%）に増加し、導入品種も9品種となった。

また、冬期のキクの補完作目として期待できることがわかった。

#### 2 出荷体制の整備による安定出荷

ラナンキュラスにとって、日持ちがよく高品質化につながる縦箱・湿式により、出荷を行う

とともに、京阪神市場へのお荷は、共選共販体制をとることになり、安定した価格で販売することができた。

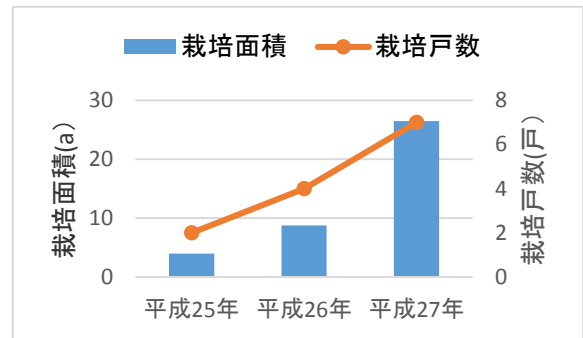


図 ラナンキュラス栽培者数と栽培面積



縦箱・湿式による出荷

### ●今後の普及活動の課題

これまでの活動によって、27年度は生産者や栽培面積は増加し、また出荷体制も整備できた。

しかし、栽培上の問題も多く、土質が県他の産地に比べ乾きやすいところが多いこと、灌水もキクより細かな水管理が必要なことが分かったほか、今後連作することにより、土壌病害の増加や球根のウイルスの感染率が高まることも予想される。

また球根の供給は生産者の希望に十分応えられない状況にあることから、現在の球根を充実させ、無病に近い状態で次年作も利用できるよう栽培技術を向上させることも必要である。

今後、ラナンキュラスが有力なキクの補完品目となるよう、関係機関と協力してこれらの課題を解決していきたい。